S.　Ashina

＜前回＞オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション――キリスト教思想史について

１．キリスト教の成立と初期キリスト教	
２．キリスト教の制度化と初期カトリシズム	
３．ヘレニズムのユダヤ教	
４．グノーシス主義	5/19
５．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家	5/26
６．キリスト教教父２――オリゲネス、アレクサンドリア学派	6/2
７．キリスト教基本教理の形成	6/9
８．キリスト教の国教化	6/16
９．キリスト教教父３――アウグスティヌス	6/23
１０．研究発表・角元	6/30
１１．研究発表・岡田	7/7
１２．研究発表・長岡	7/14
１３．研究発表・山本	7/21
１４．研究発表・金	7/28

＜ヘレニズムのユダヤ教＞

１．ユダヤ教とそのキリスト教に対する関係性
- 古代イスラエル宗教からユダヤ教への歴史的展開、バビロン捕囚以後
- 唯一神教への純化と新たな思想展開、知恵文学と黙示文学
- 復活思想の展開→キリスト教へ
- ヘブル語聖書→ギリシャ語訳聖書（LXX）、初期キリスト教への影響

２．ユダヤ教の知恵文学の展開とキリスト教
- 『知恵の書』『シラ書（集会の書）』
- 創造思想の展開と知恵の人格化→初期キリスト教→知者の系譜と教父思想
- クムラン問題？

３．フィロン
- キリスト教への多層的・多面的な影響
  聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者
- フィロンのロゴス論、神と世界との「非連続の連続」の関係
  『世界の創造』の「二段階創造論」
  第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
  神の像
- キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。

４．キリスト教にとってユダヤ教とは何か
- ヘレニズム世界という環境の中におけるキリスト教の母体
- キリスト教の成立の指標
- キリスト教の聖書的伝統からの逸脱に対する批判のための外部視点を提供する。
- きわめて近い存在であり、同時に不幸な歴史。

４．グノーシス主義

（1）グノーシスあるいはグノーシス主義とは何か

１．古代の思想運動・宗教運動としてのグノーシス

二世紀から四世紀頃にかけて、正統キリスト教会と競合関係にあった宗教運動（キリスト教内あるいは外、異端あるいは異教）の総称（単一の運動体ではない。多様の神話体系）。エリート主義的傾向の「グノーシス」（認識、知識→高次の真の知恵）を探求する古代に広範に見られる精神動向の一翼を担う。正統キリスト教（パウロ）もこの動向と緊密な関係にある。

「1:19「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」20　知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21　世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。・・・2:6　しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。7 わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。8 この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」（Ｉコリ）

1)年代：

Ｉコリやコロサイ（「2:8　人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。」）→1 世紀に後に正統キリスト教会と対抗する運動体としての「グノーシス」の存在を遡及させることは適切ではない。

「それらは「認識」に興味を抱き、同時代の哲学による意味付与を背景にキリスト教を理解しようとし、また宗教間の周縁の中で宗教的実践と思弁へ開かれていた」「われわれが次に考察しようとする運動の前史」（マルクシース、98）

「「認識」に関する統一的な理解は二世紀のはじめのキリスト者の間では存在しなかったのである」（20）、「二世紀末になると「認識者」を自称する多くのキリスト教の集団を数えることが可能になる」（24）

「Ｉコリントにおけるパウロの論敵の思想は「グノーシス的」傾向を若干有してはいたが、未だ「グノーシス主義」となるには至っていない。」（荒井、1986、179）

2)起源：マルクシースによるまとめ

「「グノーシス」の核心として何か非キリスト教的神話、所謂「救済された救済者」の神話があったというグノーシス研究の中心的理論が崩壊した」（44）

「「グノーシス」は元来キリスト教以前の運動であったが」「キリスト者であることを要求する人びとによって形成されたもの」（基本的に異端）／「最初からキリスト教外の、非キリスト教的な運動であって、たまたま一定期間キリスト教に順応したもの」（基本的に異教。ユダヤ教起源のグノーシス・ユダヤ教グノーシスを含む）

「一つの宗教」／「古代の哲学の基準へと方向づけられた、ユダヤ・キリスト教的宗教をいっそうよく理解しようとする試み」

「「グノーシス」とは明らかに古代の教養都市の中でキリスト教を時代の水準において説

明しようとする相当教養ある人びとの試みから成立した。そのさい、ユダヤ・ヘレニズム的思想家が受容していたものを同時代の通俗哲学から彼らは引き継いだ。」（112）

初期形態／大規模な体系化（二世紀後半と三世紀前半）／頂点にして終点（マニ教）
バシリデス　ヴァレンティノス（二世紀半ば）とヴァレンティノス派
プトレマイオス
ヘラクレオン
バルベロ・グローシス派
マルキオン

3)展開・広がり：大貫隆(1999)によるまとめ、堕落神話について
「人間の真の自己の隠喩としての「光」、その対立原理としての「闇」をそもそも初めから設定し、互いに対立させると同時に、二つの原理が混合し合う事件を考える型」→「イラン・マニ教型」「東方型」
「「光」そのものの中に一つの「破れ」が発生し、それが原因になって、やがて「闇」の領域に造物神が生成し、さらには彼によって目に見える宇宙万物が創造され、その中に人間が「心魂」と肉体から成るものとして創造された」→「シリア・エジプト型」「西方型」（18）

２．普遍的な精神類型としてのグノーシス
・「グノーシス主義は古代末期から近代に至るまで、地中海およびヨーロッパ文化の実にさまざまな領域、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教という歴史的世界宗教、神学、哲学、神秘主義思想、科学史などの領域において、表の文化に対する裏の文化として見え隠れしながら、連綿と影響を及ぼし続けた」「西欧における啓蒙主義と合理主義の成立も「グノーシス主義の痕跡」を最終的に越えようとする試みであったという見方」「近現代の世界文学、深層心理学、現代哲学、表象文化、ジェンダー論、世界規模の新霊性運動」（大貫、1999、305）
・ユング派の深層心理学→「悪」の問題をめぐって、グノーシス主義に注目（湯浅、宮下）。

３．概念規定に関連して（用語の混乱に対して、合意形成の試み）
・「1966 年 4 月、イタリアのメッシーナ大学において、「グノーシス主義の起源に関する国際コロキウム」」「「グノーシス主義の定義によせて」と題する報告」（荒井、1971、337）
「われわれは、グノーシス主義におけるこのような原理的側面を、歴史現象としての「グノーシス主義(Gnosticism)と区別して、「原グノーシス主義」(Proto-Gnosticism)と呼ぶことに意見が一致した」」（346）
「グノーシス主義はそれに固有な Daseinshaltung に基づく創作神話を伴うが、その本質は次のような三つのモチーフによって形成されている。(1)究極的存在と人間の本来的自己は本質において一つであるという救済の認識、(2)その前提としての反宇宙的二元論、(3)その結果として要請される、「自己」の啓示者あるいは救済者」（350）
・マルクシースの「グノーシス」類型論的モデル（34-35）
「以下でわれわれは「グノーシス」を次のような運動のことと理解する」（34）
1.彼岸の遠い至高の神。
2.神的諸像の導入、遠い至高の神よりも人間に近い諸像への分裂。

3.世界と物質についての悪しき被造物としての評価。
4.自らの創造神あるいは守護神の導入。デミウルゴス。
5.神的要素がある階級の人間内部で神的火花として眠っているが、そこから解放されるという神話的ドラマ。
6.上位の領域から降り、そして昇る彼岸の救済者像を通してのみ獲得できる認識（グノーシス）。
7.神は人間の中にあるという人間の認識を通した救済。
8.神概念や精神と物質との対立、人間論において表現される、さまざまに形成された二元論。
↓
堕落神話＋救済神話

（２）古代キリスト教とグノーシス主義

４．資料について（マルクシース、47-90）

・オリジナルなテキストを伝えるグノーシス批判の教父
エイレナイオス（二世紀末）、アレクサンドリアのクレメンス（215 年までに没）、ヒッポリトス（二世紀後半から三世紀前半）、オリゲネス（三世紀中頃より以前）、エピファニウス（四世紀後半）

・異端報告を行っているグノーシス批判の教父
ユスティノス（二世紀中頃）、テルトゥリアヌス（160-220）、シリアのエフライム（306-373）、アウグスティヌス（354-430）

・グノーシスのオリジナル資料
アスケビアヌス写本、ブルキアヌス写本、ベルリン写本、ナグ・ハマディ写本（その一部がユング写本、コプト語）、トゥルファン出土のマニ教文書、メディネット・マディ写本、ケルンのマニ写本

・非グノーシス資料
ヘルメス文書、ヘーハーロート文学

５．ナグ・ハマディ文書発見の意義

1945/46 年に、上エジプトのハムラ・ドム付近の洞窟の一つから陶器の瓶に入ったパピルス群（５２文書を収めた１３写本）を発見。最も近い集落がナグ・ハマディ。

多様な文学類型
「トマス福音書」「フィリポ福音書」（語録福音書、Q）、「真理の福音」、「ヤコブのアポクリフォン」、「ペトロと１２使徒の行伝」、「パウロの黙示録」など

「それぞれの作品はエジプトの修道院の間では、嫌悪されただけでなく、全く精神的な利得をもって読まれていたと考えることができる」

６．正統キリスト教との競合、最大のライバル、キリスト教との共通性

・パレスチナからヘレニズム大都市へ
「ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアといった古代の大都市」
Stark（2006）によれば、Rome（450,000）、Alexandria（250,000）、Antioch（100,000）

「キリスト教との相違が増大するとともに、「認識」はむしろ周縁運動へと発展していった」「地方へ引っ込んでいった」（145）

「二世紀後半から三世紀前半にかけて、キリスト教はその授業を専門化させ、ちょうど通

俗哲学の水準を上回る哲学の領域で一般的であったように、秩序だった授業計画と生徒と教師の共通した授業をもった安定した学校を形成するように努力していた」（146）、「「認識者」の小さな集団としてカリスマをもった自由な教師のまわりにあつまった。・・・この人びとはキリスト教神学が総体的に二世紀に立っていた水準にあって、三世紀の本質的な専門化傾向をともにすることはなかった。」（147）
「宗教市場において教養高い同時代人にキリスト教とその特有の世界観の便益を理解できるものとし、こうしてキリスト教を競争力のあるものとしようとする試み」「習得可能な範囲で聖書文献学や哲学的議論のような同時代の学問的方法をもちいて、時代の宗教的な大問題に向けてキリスト教的な解答を与える努力」「多くの教養人の意見に従って欠落していると考えられる部分について聖書物語を完成させる神話を語ろうとする試み」（155）「二世紀という時代はある種の実験室」「帝国の多様な片隅において才能豊かな諸個人によって、どのようにすれば古代の世界観市場に競争力のあるキリスト教神学に到達できるかについて、いわば実験が行われたのであった。われわれがここで「グノーシス」に数えてきた者だけでなく、多くの神学者が通俗的プラトン主義思想を使って実験をした」（156）、「「グノーシス」の体系を通してキリスト教をその同時代人に対して説明しようとしたキリスト教神学者の試みは、キリスト教から外へ連れ出すものとなった」（157）、「これらの体系はますます反キリスト教的論争の様相を呈していき、「グノーシス」は固有の宗教として構築されはじめていく。」（156）

・都市的環境、弁証的意図とその手段（通俗哲学と神話形成）
・キリスト教会が正統教会に収斂するプロセス＝グノーシスが異端として排除されるプロセス（論争的意図）
↓
７．反グノーシス主義の教父
論争の中の教理形成

８．争点、神話と歴史
・歴史的実在としてのイエスの意義と歴史的事実としての十字架・復活
キリスト仮現論、そしてグノーシスの多様な神話体系において、歴史的イエスの人格はもはや場を持たなくなる。
・創造の善性、神の唯一性（二元論に対する一元論）

（３）現代的課題としてのグノーシス
９．ユング心理学とグノーシス研究、そしてその意義
ヨーロッパ精神史の多層的理解、異教は過ぎ去ってはいない。
10. 「近代とはグノーシスの超克である」「世界肯定」（ハンス・ブルーメンベルク）
「近代とは、世俗化したグノーシスの時代である」「技術の時代という現在の危機」（ペーター・コスロフスキー）
11. 現代の異教としてのグノーシス・タイプの新宗教

＜参考文献＞
１．Henry Chadwick, *The Early Church*, Penguin Books, 1967.
２．Ｃ．マルクシース『グノーシス』教文館。

３．筒井賢治『グノーシス――古代キリスト教の＜異端思想＞』講談社選書メチエ。
４．大貫隆訳・著『グノーシス神話』岩波書店、1999年。
５．大貫隆『グノーシスと「妬み」の政治学』岩波書店。
６．荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』1971年、『新約聖書とグノーシス主義』1986年、岩波書店。
７．湯浅泰雄『ユングとキリスト教』『ユングとヨーロッパ精神』人文書院。
８．宮下聡子『ユングにおける悪と宗教的倫理』教文館。
９．荒井献・大貫隆編『ナグ・ハマディ文書Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』岩波書店。
10. 柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房。
11. ハンス・ヨナス『グノーシスの宗教――異邦の神の福音とキリスト教の端緒』人文書院。
12. 霜田美喜雄『キリスト教は如何にしてローマに広まったか[新装版]』早稲田大学出版部。
13. Rodney Stark, *Cities of God. The real Story of How Christianity Became an Urban Movement and Conquered Rome*, HaperOne, 2006.
14. 櫻井義秀・中西尋子『統一教会――日本戦教の戦略と韓日祝福』北海道大学出版会、2010年。